

養蚕における女性の役割

A Study on the Role of Women in Silk Industry

倉石 あつ子

要 旨

本稿は跡見学園女子大学の研究助成費給付を受け、池上貞子との共同研究によるものである（共同研究の趣旨は本稿冒頭に記述した。池上貞子の研究要旨は「張愛玲文学に見る絹の諸様相と“恋衣”」を参照）。筆者は養蚕における女性の役割に視点を絞って論じることとした。

「養蚕は女性が行うもの」という伝統的な考え方があり、事実近年までの養蚕は女性が主体となって行ってきた。しかし、実際の労働を見るときなぜ女性でなければならないのか、女性でなければならない部分が見えないままに、養蚕は女性が行うものという伝統概念と思われていたものを受け入れてきたことが分かる。本稿では、現実の蚕の飼育過程における女性の役割を見直すことにより、養蚕と女性の関わりの根源がどこにあるのかを考えていく。中国最大の養蚕地帯である浙江省桐郷市の養蚕農家にフィールドを定め、周辺の環境や文献資料などできるだけ多くの情報にあたり、分析することとした。その結果、催青にかかわる作業に「女性」であることを強く求める部分のあることが判明した。それは、女性のもつ「子産み」や「子育て」という女性性をを最大限に活かしたものであることがわかる。蚕育ての時期には女性がかかわり、蚕育（子育て）が終わるとその関わりはしだいに女性から男性へと移っていく。蚕育てを子育てにみ立て、女性の役割としているのではないかと考えられる。

一 はじめに

文学部人文学科所属の池上貞子・倉石あつ子は、2001年度・2002年度の二カ年にわたって大学から研究助成費の給付を受け、「女性とモノ」というテーマの下に調査研究を行ってきた。研究代表者は人文学科教授池上貞子であり、筆者はその共同研究者という立場である。代表者は張愛玲の研究者であり、文学作品を通じて描かれる女性とその女性たちが使用するモノに焦点を絞ることとし、モノを特に絹製品に絞った。張愛玲は上海を主たる居住地として作品を送り続けてきた女性作家であるが、その作品の中にはさまざまな道具が描かれている。中でも絹製品は上海上

流家庭の女性たちの身を飾るものとしてしばしば作品に登場する。そこで研究代表者はそれら絹製品の作品への用いられ方とともに、色へのこだわりや色のもたらす効果について研究を深めることとした。共同研究者である筆者は、絹製品の素材となる蚕を飼う女性たちの暮らしぶりに焦点を当て、文学作品のいわば背景を描き出すことにした。したがって、筆者は主たるフィールドを養蚕が盛んに行われている中国の一大養蚕地帯である、浙江省およびその周辺に定めることにした。この地域は華南あるいは江南と呼ばれる地域であり、幸い、上海からもそう遠くない上に、張愛玲の作品にも華南地域は登場するため、地域的にも研究代表者との課題の共通性がもてると考えたからである。

二年にわたる調査は今後課題を残しつつも、新たな資料との出会いを初めとする実り多いものであった。機会を与えてくださった関係者各位にお礼を申し上げる。

調査対象は中国浙江省桐郷市梧桐鎮三新村の王家と張家を中心に定めた。2001年6月の予備調査において、日本ではほとんど見られなくなってしまった人手・それも女性の労働力をあてこんだ養蚕がまだ行われていることが確認できたためである。さらにこの地方は先に述べたように、中国における一大養蚕地帯であることから、蚕種の改良などにおいて日本との交流もかつては盛んであったからである。そうした交流の中で、養蚕の飼育における技術的な交流もあったのではないかという予測もあり、当然のことながら当初の研究費申請目的である「女性とモノ」の、モノの部分においても、日中との比較ができるのではないかと考えたからである。

本稿では、主として中国のフィールドからの成果について述べていくが、必要に応じて若干の日中比較をしていくこととする。フィールドの概略については既に跡見学園女子大学文化学科報『フォーラム』20号で述べているので、『フォーラム』を補充する内容に重点をおくが、多少の重複は避けられない。

二 急変する農村

筆者が養蚕農家を調査するために定めた主たるフィールドは、上海から南西に約150キロにある、浙江省桐郷市梧桐鎮三新村の王家・張家である。桐郷市はいわゆる江南地方に属し、温暖な気候に恵まれ、各所にあるクリークが一大水郷地帯を作っている。桐郷市の北端には景観保存区烏鎮があり、中国国内からの観光客でにぎわっている。この烏鎮は古い民家や筆作り職人の家や藍染めの工房など古い店がクリークぞいに軒を連ね、その家々の間を縫って石畳の路地が連なっている。鎮のほぼ中心にある広場には二階建ての舞台があり、日に何回か漫才のような越劇が演じられている。こうして古い「ひなびた」雰囲気や、農村的な雰囲気を併せ持つ烏鎮は、現在観光地として売り出そうと市当局は勿論観光業者もその売り出しに懸命である。桐郷市内には欧米人や日本人を想定したホテルも既に建てられているが、まだ欧米人や日本人は少なく、ホテルは

台湾からの観光客が多い。そうした中に、日本人ビジネスマンらしき人々も見られ、今後のビジネス展開が予測される。しかし、この地域はかつての日中戦争の最前線であり、ときには「日本人」であることに厳しい目を向けられることもある。

烏鎮の中には、文学者茅盾の故居がある。茅盾は短編小説『春蚕』をはじめ、エッセイ「香市」「郷村雑景」「桑樹」などにおいて1920～30年代の農民の生活とその社会背景を克明に描き出している。これらの文学作品の中にも後述するように、養蚕の貴重な資料が含まれている。桐郷市の主たる農産物の30%は養蚕が占めているといわれ、養蚕は貴重な収入源であった。また、桐郷市一帯は菊茶の産地としても名高く、烏鎮ももちろんだが、ホテル内の売店でも土産物として売っているし、農家では自家用の菊茶を作っている。

フィールドとしている三新村は、観光地烏鎮からおおよそ八キロほど南下した、桐郷市域にほど近い場所に位置し、联新村・新建村・新安村の三村を一括りにした地域の呼び名である⁽¹⁾。王家は新建村に属し、新建村には王一族・C一族・S一族が住んでいる。一族は全て同じ姓によって成立っており、王一族は34戸から成り、王家埭と呼んでいる。日常生活のさまざまな場面で互助関係にあるとともに、私たちのような外来者が訪れると、どこの家に客が来ているかという事はすぐに知れ渡り、あっという間に大人・子供たちが入れ替わり立ち代り訪れ、どこから来たのか、いつまでいるのか、何をしに来たのかなどなどの質問を矢継ぎ早にして帰っていく。一団が帰っていくとその中の一人がまた別の一団を案内してくるといった調子で、一族のほぼ全員が顔を出して歓迎してくれる⁽²⁾。

現在、王家一帯は道路の拡幅計画による立ち退き命令が出ており、それぞれが道の向こう側にある土地（より市街地に近い側）に、現在、家を新築中である。現在住んでいる家は、道が広がると道に面した場所になるために、商売をする人に貸せる予定だという。母屋の裏手にある、物置などに使っていた建物は、既に取り壊しが始まっているものもあり、王家の裏も昨年まであった農具を入れたり羊を飼っていた物置は既に取り壊され、羊はより狭い外便所に隣接する小屋に移されていた。また、王家では次女を上海の大学に入れるための資金作りとして、もっていた水田や桑畑のほとんどを売ってしまったという⁽³⁾。そのため、今年から農業は行なわないといい、代わりに新築した家の3階部分および屋根裏を他人に貸せることによって、現金収入を得ようと計画している。ただ、古い家のほうもそうだったが、貸し手の方は都市人に貸せたいと思い、借り手の方は地方から出稼ぎに来ている農民が多いので、より高い家賃をとって貸せられるような借り手が見つかるか否かは、不明である。こうした状況は王家のみでなく、今後、次第に増えて行くことが予測され、それは桐郷市内にある桐郷市蚕業管理会社の蚕種の掃き立て数の減少によっても知ることができる。

こうして王家を含む周辺農村地帯は、生業・経済・生活環境さまざまな面において急激に変貌を始めている。王家もまさにその波の真っ只中にいるといっても過言ではない。王家は現在、母

親と二人の娘の三人家族である。母親のKは45歳、長女は21歳で、烏鎮で中国人観光客のガイドをしている。彼女には近くの石門出身の婚約者がおり、近いうちに結婚する予定である。次女は高校生で、学校は家の近くにあるが、全寮制なので普段は家にいない。成績が良いので本人も母親も大学進学を考えており、長女や次女の将来と絡んで王家の行く末は不透明な部分がある⁽⁴⁾。Kの姉が同じ三新村の張家斗に嫁いでいる。張家は道路拡張にかかっておらず、しばらくは現状のままで暮らせることになっている。張家はKの姉KK（51歳）とその夫・息子夫婦と孫（1歳）の5人家族である。夫は電気屋を営み、息子は電気工場に・息子の妻はナイロン工場に勤めている。したがってKKは孫の面倒を見ながら、養蚕を行っている。昨年までは王家も養蚕を行っていたので、姉妹で互いに情報を交換しあったり、手伝いあったりしていた。後に述べる含山の蚕神に参拝するときも姉妹で出かけていったという。

このように、昨年まで互いに労力の交換などを行っていた姉妹であるが、道路の拡幅という政府の計画にかかった妹とかがらなかつた姉とでは、全く生活環境が違ってきている。王家には当然のことながら幾ばくかの補償金が入ったし、その上土地を売った金が入り、現在は「現金」を持っているかいないかということと比較すれば、Kの方が各段に現金を持っていることになる。Kの次女はそうした状況が少々得意げで、現金をもつことが都市民に近づく条件であるかのような口ぶりである。開発することは発展に繋がるという考え方は彼女のみではなく、ごく一般的な考え方であるから、開発によって発展し、そのことによって現金をたくさん持つことこそがより人より抜きん出ることになるという考え方は、やがて中国農村部の各地に見られることになるだろう。日本が高度経済成長期を迎えたときのような状況が現在の中国には起こっており、上海や杭州に近い桐郷市などは今後ますます開発が進むものと考えられる。また、開発によって、地域や家の経済格差もますます広がっていくことも予測される。

三 王家と張家の養蚕の現状

桐郷市周辺では、蚕を一年に五回掃き立てる（家の労力の確保や桑畑の面積によって、必ず五回とも飼うというものではない）。春蚕・夏蚕・秋蚕・晩秋蚕・冬蚕の五回である。桐郷市内の梧桐・石門・烏鎮は、かねてから良質の蚕種が産出される土地がらといわれ、養蚕が盛んに行なわれた。その背景として、良質の桑がとれるという養蚕に必要な好条件を備えていたからであった。五回の掃き立てのうち、最も重要視されるのは一番初めに掃き立てられる春蚕であり、かつては掃きたての時期やその前後にさまざまな儀礼が行なわれた。王家のKも張家のKKもそれらの儀礼を行なっていないので、『桐郷県志』『春蚕』『香市』⁽⁵⁾などから拾ってみることにする。

蚕種の孵化は旧暦四月二十日の穀雨節の日を避けて、その前に掃きたてるとよいと言われている。それは現在もほとんど変わらず、その日を目安としてさまざまな準備が行なわれる（道具については写真参照）。

養蚕における女性の役割

現在、蚕の種は桐郷市蚕業会社が一手に管理し、1992年にできた「桐郷市催青大楼」で稚蚕飼育を行なって、催青させたものを各地のセンターに配布し、そこから各家に届けるという方式を取っている。したがって、温度管理や桑を刻んでくれるといった一番手のかかる時期は過ぎた蚕が各家に配布されることになる（ただし、王家は昨年も催青から自家で行なっていた。催青については後述する）。かつてよりは手がかからなくなったにもかかわらず、繭値が下がっているために94年には77万張りの蚕種を催青させていたものが、2001年には56万張りに減っている。繭値は現在、蚕業公司以決めているが、春・夏・秋ともに50キログラムの値が一時期の5分の2ほどに（約300元）下がってしまった。特に2001年9月11日のWTCテロ以降、秋蚕の繭値は、85年と同じ位の値になっている。こうした状況は養蚕農家にとっては大きな打撃であり、年々養蚕農家は減る一方となっている。また、続けている農家でも、2～3張り飼っていた家では、1.5～1張りに減らすといった措置をとるようになり、そうした変化に当たって桑畑も減っている。しかし、養蚕は、もともとこのへんの農家の主たる現金収入源であり⁶⁾、急に養蚕をやめようと生計が立てられない農家も出てくる可能性があり、繭値の値下がりにはさまざまな問題を引き起こしている。

このようにしだいに変化しつつある状況の中で、王家と張家の養蚕は行なわれている。王家は先に述べたように今年は養蚕をやめてしまったので、昨年の夏蚕が最後であった。催青から自家で行なっているが、その様子は既に拙稿⁷⁾に述べてあるので割愛する。催青を自家で行なっても、現在は儀礼めいたことは一切なく、清明節（4月3日頃）に湖州市含山寺の蚕花神の祭りに出かけていくくらいのものである。KとKKは姉妹連れ立ってバスで出かけるとのことだが、往復3時間くらいかかり、1日かかりの遊山といった趣である。現在も祭りの日は非常に賑やかで、近在から10万人の人出があるといわれている。寺に祭られている蚕神に線香を供えるなどしてお参りするが、お札などを買ってこることはしないという。紹興で出会った湖州出身の女性（20歳ぐらい）によれば、彼女はこの含山寺近くの農家の出身で、現在も生家では養蚕を行っており、含山寺の縁日にはみんなでお参りに行くのだという。このとき、若い娘たちはみんな着飾り、頭に紙で作った造花を飾っていく。何故こんな格好をして行くのか不明であるが、『春蚕』によれば、孵化した蚕を掃きたてる収蚕のときに、掃き立てる為の鳥の羽根と造花を頭につけて蚕室に入っていく、そうした行為と何か関わりがあるのかもしれない。山の下の川辺では闘拳なども行なわれる。

王家も張家も含山寺にお参りに行く以外にはなにもしないが、1930年代頃まではさまざまな伝承があった。

①清明節の頃の陽気とその頃の桑の芽の出具合で養蚕の豊凶を占う。暖かいと「蚕花二十四分（繭が大豊作）」「清明の若葉は、蚕娘を踊らせる（豊作）」などという。

②蚕を飼うための籠を蚕簞というが、蚕簞の底に専用の紙を貼る。紙には聚宝盆（金銀財宝が

無限に出てくる鉢)の絵や、蚕太子(馬上で三角旗を手にした姿)の絵が印刷されている。

③穀雨節の日を避けて収蚕させる。理由は不明。

④窩種(催青のために蚕種を体に抱いて暖めること。女性の仕事とされた)から収蚕まで3~4日かかるが、その間は家中が静にして蚕神を驚かしてはいけない。

⑤蚕種を抱いた日にドロで包んだんにくを蚕室の壁際に置く。収蚕の日の芽の出方によって蚕の豊凶を占う。芽がたくさん出ていたほうが豊作。

⑥収蚕のときには花を摘み、いぐさと摘んだ花を混ぜておく。蚕種を抱いた女性は、掃き立てのための鳥の羽根と蚕花と呼ぶ紙の造花を髪に挿して蚕室に入る。孵化した蚕種の紙を開いた上に、いぐさと花びらを撒く。それを蚕簞の上に、髪に挿していた鳥の羽根を使って種紙から掃き落とす。蚕種を蚕簞の上に掃き終わると、髪に挿していた蚕花とともに掃き立てに使った鳥の羽根を蚕簞の縁に挿す。

⑦蚕の病気が発生したりした家のものとは口を利いてはいけない。その家の近くもなるべく通らない。不運が伝染するからである。

⑧蚕が繭を作るとき、マブシを覆うようにすだれを張るが、繭ができ上がるとすだれをはずす。その日を浪山頭といい、親戚や友人が望山頭に訪れる。餅・春雨・梅の実・枇杷・塩漬けの魚などを祝いとして持参する。

こうした伝承は、蚕種の改良によりいわゆるあたりはずれが少なくなるにつれ、次第に消滅していった。中国の場合には何回かの革命等によって、古いものは改めるべきという考え方が庶民に浸透していったことも、伝承の消滅には大きな影響を与えていると考えられる。K・KKともに、上記のような伝承はほとんど継承していない。しかし、養蚕は主として女性の仕事だといい、自分たちが主体になって行なうべき仕事と考えているところは従来と余り変わっていない。

四 養蚕と女性

では、実際に女性たちはどの部分に、どのように、養蚕に関わっているのでしょうか。現在、蚕種は前述したように公司以催青させたものを各家に配布するので、各家でどんな種を飼うかと言う事を選択する必要はない。センターができるまでの1990年ごろまでは、種が合わなかったりして病気で全滅してしまうようなことがあったというが、現在はそうしたことがなくなった。種によってあたりはずれがあった時代には、どこの種を買うか、洋種にするのか中国種にするのかといったいわば賭けとも思える選択をまずしなければならなかった。そして、それらをどのくらいの量飼育するのも、自家の桑畑の面積や桑の育ち具合を考えて決めなければならない。女性たちも意見はいろいろ、最終的にどんな種をどのくらい飼うかは、家長の決定となり、例えば跡取り息子といえども家長の決定にしたがうのが一般的であった。このへんの決定の仕方は日本とほぼ同じである。

養蚕における女性の役割

やがて時期になると、申しこんだ数にしたがって種が届けられる。現在は四角な枠にガーゼのような布が張ってある種枠で届けられる。これを一張り・二張りと呼ぶ。王家の昨年の春蚕の掃き立ては一張りである。

掃き立ての時期までに、蚕を掃きたてる蚕房と大きくなった蚕を飼う蚕室および道具の消毒を行なう。この作業までは男女ともに行ない、蚕籠を川で洗ったりするのは女性、洗った蚕籠を運んだり、蚕籠を乗せる蚕台の扱いは男性といったように、それぞれが無理なくできる仕事をするといった状態である。蚕が上簇して、道具をしまうときも同じように共同で行なう。そして部屋を消毒するのも、できるものが行なっている。しかし、この後蚕を催青させるところからは、実際に蚕に関わるのは女性で、男性は桑摘みなどの作業で協力するという分業制を採る家がほとんどである。王家・張家ともに、この男女分業に大きな変化は見られない。何故、女性が養蚕を行なうのか、K・KKともに「知らない」「分からない」というが、昔から（自分たちのおばあさんの頃も）女性が蚕を飼ってきたという。

そうした中で、彼女たちが神経を使うのはやはり蚕が孵化するときと孵化して以降、二眠明けくらいまでである。特に蚕房や蚕室の温度管理は大切で、この時期の温度調節に失敗すると、せっかく二眠・三眠まで育った蚕が病気になって全滅してしまうという。特に春蚕と冬蚕の時の温度管理は大変で、蚕籠を二重にして下の蚕籠に布団を敷いた上に種のある（あるいは孵化したばかりの蚕のいる）蚕籠を載せ、上に毛布をかけたりして温度管理をする。孵化に必要な温度は華氏八十二度なので、寒いときには蜂燭煤（練炭）を蚕房内に入れるが、煙や煤は蚕には厳禁なので、練炭コンロに煙突をつけて煙が室内にこないように工夫をしている。季節によっては、蚕籠の下に熱湯を入れた盥などをおいて温度調節を行なう。この場合は、熱いお湯を入れ替えるために2時間おきぐらいにお湯を取り替えなければならない⁽⁸⁾。

このように、蚕が小さいうちはちょうど自分の子どもを育てるように、大切に大切に育てていなくてはならない。K・KKともに自分で行なったことはないというが、自分たちのおばあさんの時代の昔の女性たちまでは、この催青の作業を自分の体温を利用して行なったという。蚕種が産み付けられた種紙を、風呂敷のような布に包み、種紙のほうを腹面に当てて、孵化するまでの二日間くらいをそのまま過ごすのである。まさに自分の子どもをお腹に入れているときと同じような状態の日が数日続くということになる。映画版『春蚕』にはその様子が、原作に忠実に詳しく描かれている。こうして女性たちは自分の子どもを生み出すように、蚕を孵化させていたのである。うまく孵化できたとき、孵化した蚕が動き出す、その動きが女性たちにとってはなんともくすぐったい心地よさをもたらした。つまり、孵化およびその後暫くは、女性の子育てと蚕育てとを重ね合わせて、女性にとっても絶対に女性でなくてはならない仕事、と考えられていたようである。

蚕が大きく育つにしたがって、桑の量も大量に消費されるようになるので、桑摘みなどに男性

の手を必要とするようになる。特に大眠（日本でいう4眠あるいはニワヤスミ）以降、上簇するまでは桑の葉を大量に必要とし、このとき充分食べさせないと蚕はなかなか上簇しない上に、いい繭を作らないと言われている。そして、上簇時期になると、桑を食べなくなり体が黄みがかって透き通ってきた蚕（日本ではヒキタという語で表現する）だけをひろって、方格子（マブシ）に移さなければならない。全ての蚕をいっせいに方格子に移せるというものではなく、ヒキタものから順次移していかなければならないので、これまた人手がいる作業である。したがって、それまでは女性によって丁寧に育てられてきた蚕も、女性だけの手には負えなくなり、大眠を過ぎてから上簇するまでの間は、男女ともに桑摘み・給桑・上簇の仕事をしなければならなくなる。これは日本においても同様で、四眠から蚕が起きると、女性だけの仕事ではなくなり、一家をあげての作業となる⁽⁹⁾。

そして繭を方格子から離す繭かき・ケバとり・出荷と男性も積極的に関わっていくことになる。このへんの切り替えの人々の意識は、聞き書きからも明かにはならない。単にそれまでは、蚕が小さく女性だけ（女性のもつ体力的な力という意味）のできる仕事であり、これ以降は大量の桑を必要とし女性だけでは手が回らないから、という説明で終る。蚕飼育を子育てに見立てれば、既に離乳食も終り、オムツもとれてほとんど母親の手がかからなくなった子どもであると考えることができ、あとは食事である桑さえ十分に与えていればそれほど間違いは起こらない時期に達したといえるのかもしれない。

こうして上簇して一週間もたつと、蚕は白いきれいな繭になる。そしてこの繭を出荷しに行くのはほとんどが男性である。日本でも売りに行くのはほとんどが男性で、町の製糸家や中継所に行って繭を売り、その金で呑んだり遊廓に行ったりして家に持ちかえった金はいくらもなかったなどという話しはあちこちで聞くことができる⁽¹⁰⁾。女性たちが我が子を育てるように飼った蚕も、いよいよ現金に換える段になると男性が主導権を握り、売った金はほとんどが家の家計費の中に組み込まれるというシステムになっていた。日本でも、かろうじて晩秋蚕や晩々秋蚕を飼った売上金を女衆の小遣いとして認めるところがあるくらいで、ほとんどが家計費として組み込まれ、苦労した女性たちの懐には全く入らないことも少なくなかった。

五 まとめにかえて

以上のように、養蚕は「女性の仕事」とされているが、それは蚕が小さいうちだけで、実際の作業上は蚕が成長するに従って女性だけの仕事とするには無理があることがわかる。そこで、蚕の四眠後頃から男性はもちろん、家をあげて手伝うことになる。そうしなければ、蚕は良い繭を作らず、良い繭ができないと言うことは売上高にも影響が出てきて、家計を圧迫することになる。したがって、家をあげて養蚕の手伝いをするようになるが、にもかかわらず「養蚕は女性の仕事だから」と考えることが多かった。それはなぜなのかを考えてみたとき、女性でなければならな

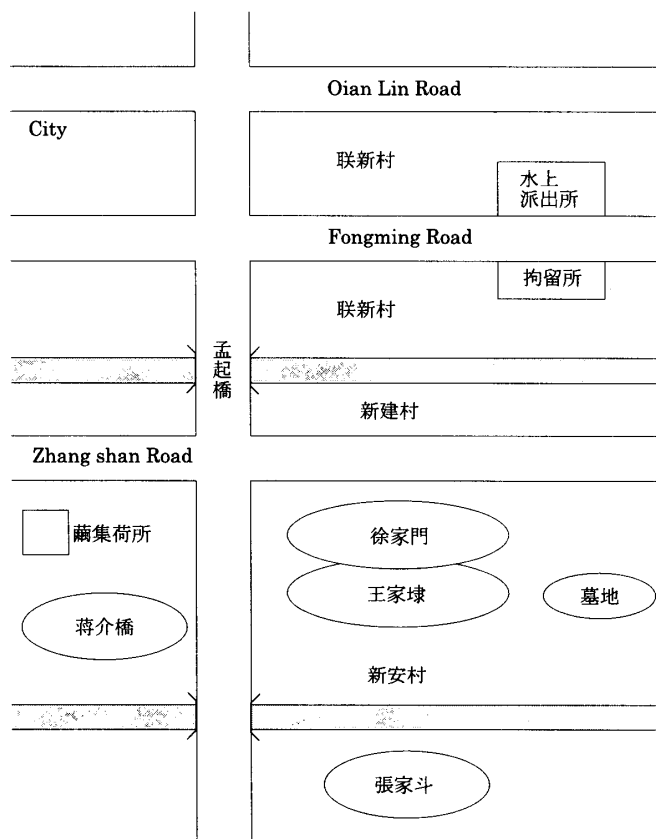
いという仕事は実際の作業行程には何一つないことがわかる。蚕室の消毒や養蚕道具の手入れ⁽¹⁾、購入、桑の手入れなど実際に蚕に直接手を触れない部分では、男性が関わる仕事も多いし、力のある男性でなければなかなか大変な作業も多い。にもかかわらず「女性の仕事」として女性が関わってきたのは、どうみても催青の行程を女性が我が子を腹に抱くように（あたかも妊娠したかのように背ではなく腹に）抱えて暖め、孵化すると宝物でも扱うように掃き立てるといふ、その行為にこそ「女性」の必要性を認めていたのではないかと考えられる。もちろん、その後も給桑をするのはほとんどが女性であり、手伝うと行っても男性は桑摘みやはずした蚕尻の始末などで、男性も給桑を手伝うようになるのは近年のことである。女性が男性より細やかな愛情を持ち、様々な面に気を遣い、手先も男性よりは器用で、何よりも優しい心を持っているとすれば、蚕のような繊細な生き物を育てるのには男性より女性の方が適していると言うことになるだろう。しかし、女性が誰しもそうした特性を持っているとは限らず、どうやら作られた女性のイメージによって、養蚕という役割を女性たちが担っている（担わされていた）としか思えないのである。その根底には各地に伝わる養蚕起源説話があることは想像されるが、養蚕起源説話についてはすでにかなりの資料の蓄積が見られるので、稿を改めたい。

現時点では、実際の作業行程の中で、養蚕がなぜ「女性の仕事」とされたのかという点に視点を置いて考えてみた。中国に見られるような孵化のさせ方に関する資料は、文献においても聞き書きにおいても明らかになっているもの

はごくわずかである⁽²⁾。これらの伝承に関わる資料が中国においても日本においてももっと発掘されることにより、女性と養蚕との関わりはより解明されていくものと考えられる。この点については引き続き調査を行い、資料の蓄積に努めたいと考えている。なお、現在中国で使用されている養蚕に関わる道具のいくつかと、生活実態が分かる写真を本稿の最後に掲げたので、参照されたい。

注

- (1) Kとその娘による三新村の概念図である。村の主たる目印として水上派出所や拘留所・繭の集荷所などが盛り込まれている。
- (2) Kの家は王家埭といい、王姓のみで構成



Kの三新村の概念図

されている。写真3に示された洗濯物のある家にはそれぞれに家族が住んでおり、それらの人々に前もってKが知らせておいたものと思われ、ほぼ全戸から見物人が集まってきた。中には昼食をとっている最中に訪れる人もいて、どんなごちそうを作ったのか確認していく者さえみられた。

- (3) 耕地の中には道路の拡幅工事にかかる場所もあり、これを機会に娘の学費を確保するという目的のためにも土地は整理してしまうという決断をした。しかし、大金が入ったために、四年間同棲していた男（娘たちはこの男を父親とは認めておらず、ほとんど口をきかなかった）がその金の一部を持ち逃げするという事件も起き、Kにとっては心穏やかでない日々が続いている。
- (4) 農家にとって跡取り息子がいて家を継いでいくという相続形態が現在でも理想とされている。しかし、Kの家は娘二人のため、できれば長女が結婚するSに婿養子として入ってもらいたいと考えている。Sの両親はKの家に入ることを反対しており、Kは「自分の親の言い分ばかり聞いている」という不満をSに対してもっている。次女はたぶん上海あたりの大学へ進学するだろうが、その後そのまま上海に住み着いてしまったときには、Kが次女とともに上海で暮らすこともあり得ることも、K自身が示唆している。
- (5) 『桐郷県志』第十編「蚕桑刺繡」《桐郷県志》編纂委員会編 1996年
「香市」「郷村雑景」「桑樹」「病子」『茅盾作品集』
「春蚕」『藻を刈る男』宮尾正樹他訳 JICC 出版 1991年
- (6) 桐郷市蚕業管理公司総責任者 徐永仙氏による
- (7) 「蚕育てと女性－中国養蚕農家の事例から－」『フォーラム』20号 跡見学園女子大学文化学科 2002年
- (8) 詳細は前掲(7)参照
- (9) 日本では、四眠から起きると家中あげての作業となるが、蚕種にするための蚕を飼育する家は、上族前に雌雄の鑑別を行う。長野県松本市などを初めとする多くの地域では、このときに雌雄の鑑別の仕方を指導するのは男性の養蚕教師であり、実際に鑑別を行うのは訓練を受けた多くは嫁入り前の女性たちであった。ここでも蚕についての研究・指導をするのは男性、実際に蚕にさわったりするのは女性という役割分担がなされていた。鑑別は各養蚕農家を訪れ、半日あるいは一日（蚕の量によりかかる時間は違いがあるが）で雌雄を分別する仕事なので、男性が行っても何ら不都合はない。にもかかわらず、鑑別士は女性であった。
- (10) 『春蚕』では、あまりにも豊蚕であったがために、繭値がぐずれ、300キロも離れた町まで繭を売りに行ったにもかかわらず、結局は手元にいくら金も残らず、無理をして借りた借金だけが残った、という笑うに笑えない結末となっている。養蚕は世界大恐慌などの影響をまろに受け、生糸相場は乱高下を繰り返して養蚕農家を不安に陥れた。中国杭州市あたりでは、加えて日本軍の侵攻により、せっかく設備を整え始めた製糸工場や蚕種の改良所などが破壊されるという事件も起こり、1930年代は養蚕農家の疲弊を招いた。
- (11) 『春蚕』のCVD（上海大学在学の神谷利子氏提供）などにもその様子は詳細に描かれているが、蚕道具は近くの川で洗って乾燥させ、次の掃き立てに備える。O家でも写真18の洗い場まで道具を運び洗って乾燥させる。男手のないO家にとって、Kがこの仕事をせねばならず、道具を川まで運ぶことも、水を含んで重くなった道具を持ち帰ることも大変な作業であったことが想像される。

道具は1920年代まで旧暦3月1日から15日まで、土地の神を祭る廟の前で市が開かれ、桑の苗木などもこのときに販売された。茅盾「香市」などによると、市はおよそ次のようなものであった。市には旅回りの芝居の一座なども訪れ、近在の農民たちはこの市に出かけ、忙しい養蚕の時期を迎える前のひとときを

養蚕における女性の役割

楽しんだ。しかし、1911年の辛亥革命以後、迷信打破ということで市は禁止となり、廟は警察の分署や蚕種改良所になってしまった。1932年ごろ第一次上海事変の国難に対して政府は地元の商業界に義捐金を出せと命じたので、商業界は鎮の区長に香市の復活と交換条件とすることを申し入れた。こうして香市は1930年代に復活したが、上海事変によって繭値は暴落していたので、市を訪れる農民の数も昔のようではなく、市を復活することで町おこしを計った商業界であったが、商人の思惑は全くはずれてしまった（池上貞子訳による）。

(12) 管見の限りでは、『桐郷県志』『蚕飼養法記』などに記述が見られるのみである。板橋春夫氏の教示によると、群馬県下ではこの方法の催青の話をいくつか聞くことができたと言うが、筆者はまだ確認していない。また、長野県南安曇郡三郷村では村史編纂事業の活動の中で、養蚕に関する新たな資料がいくつか見つけられており、それらを丹念に読み込んでみれば、新たな発見があるかもしれない。

参考文献

- 費孝通『中国農村の細密画』小島晋治訳 研文出版 1985年
- 費孝通『江南農村の工業化』大里浩秋 並木頼寿訳 研文出版 1988年
- 板橋春夫「養蚕習俗の研究」『群馬文化』196号 1983年
- 林愛也『おらが村の養蚕のむかし』ティディアイ1999年
- 鈴木満男「江の蚕神信仰」『呉越の風 筑紫の火』東アジア文化交流史研究会 1991年
- 日本絹の里編『蚕種』1999年
- 日本絹の里編『製糸』2000年
- 日本絹の里編『皇居のご養蚕展』2002年
- 福島県立博物館編『天の絹糸』1998年
- 長野県立博物館編『蚕糸業にみる近代の長野盆地』1990年
- 日本絹の里編『「お蚕さま」の四季』1998年



写真1 烏鎮のクリーク（2001年9月撮影 以下同じ）



写真2 烏鎮の辻にある芝居小屋 茅盾の随筆に登場する場所と思われる。

養蚕における女性の役割

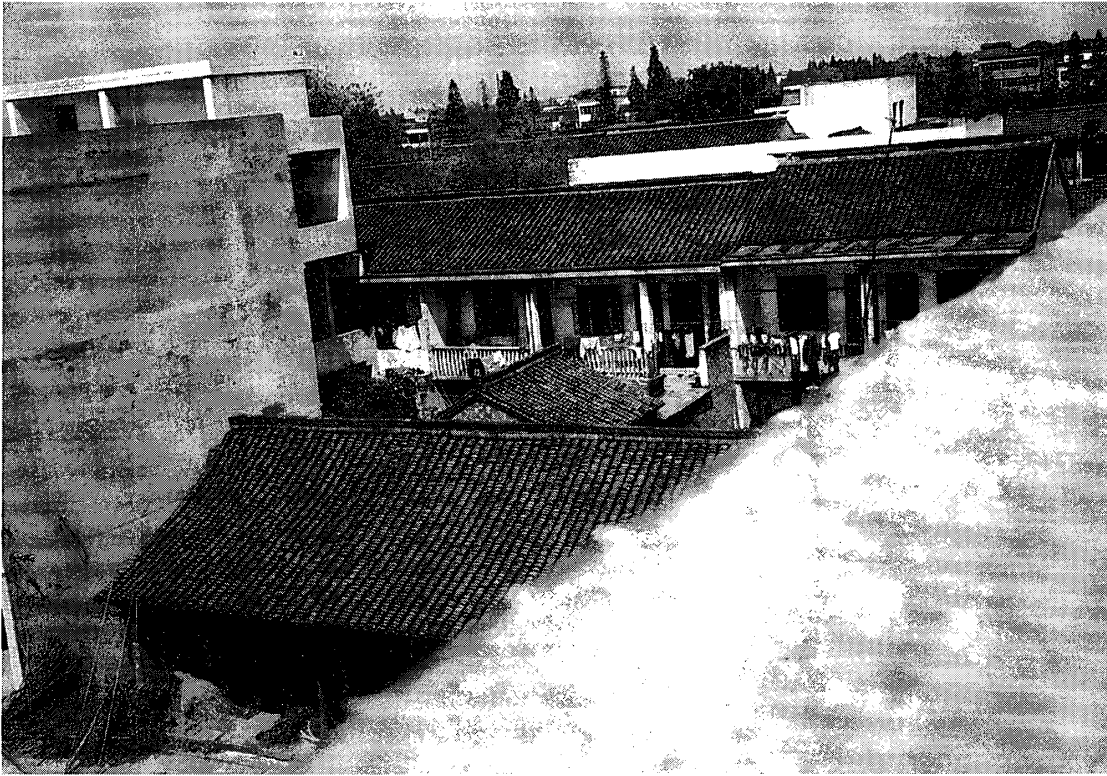


写真3 王家2階よりみた農家の風景

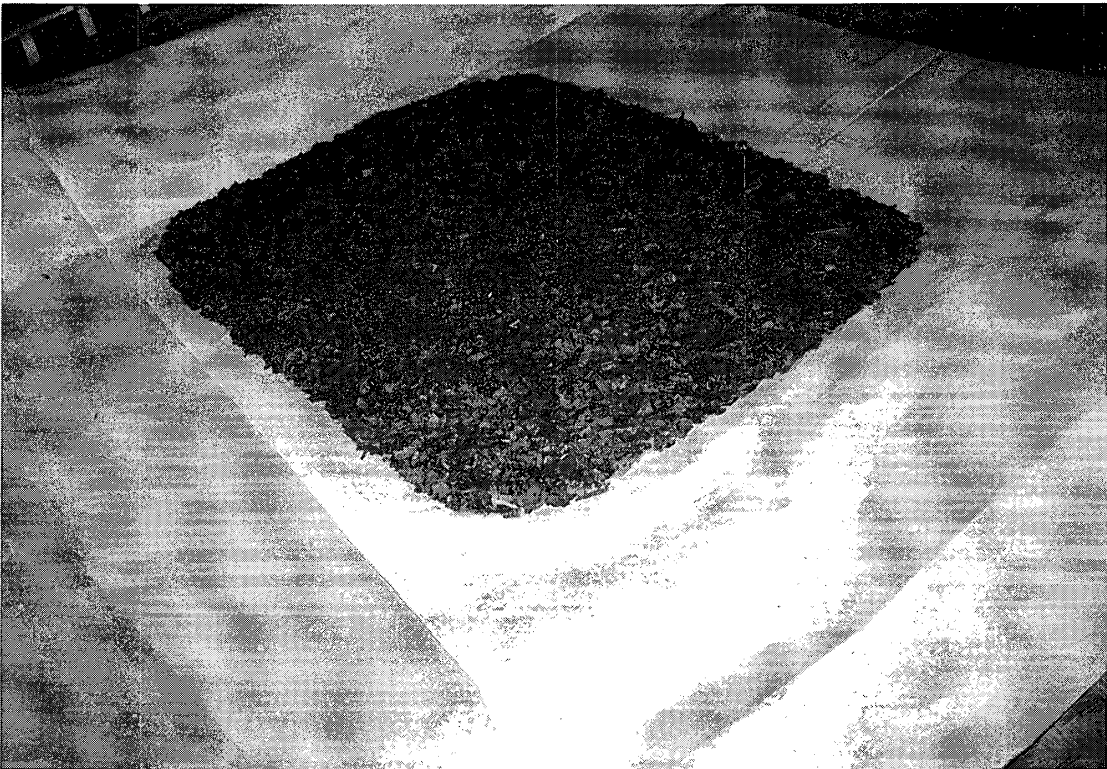


写真4 掃き立て3日目の蚕 (2001年6月撮影)

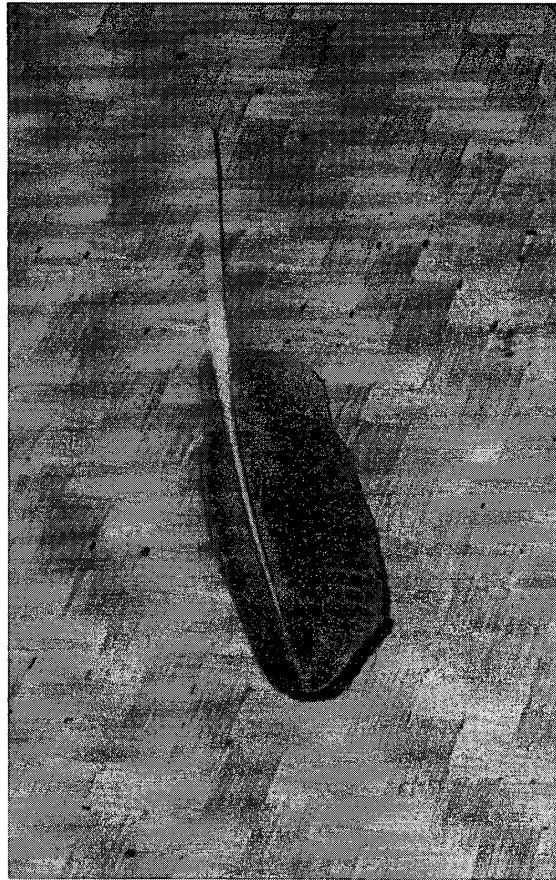


写真5 掃き立てに使う鳥の羽(2001年9月撮影 以下同じ)

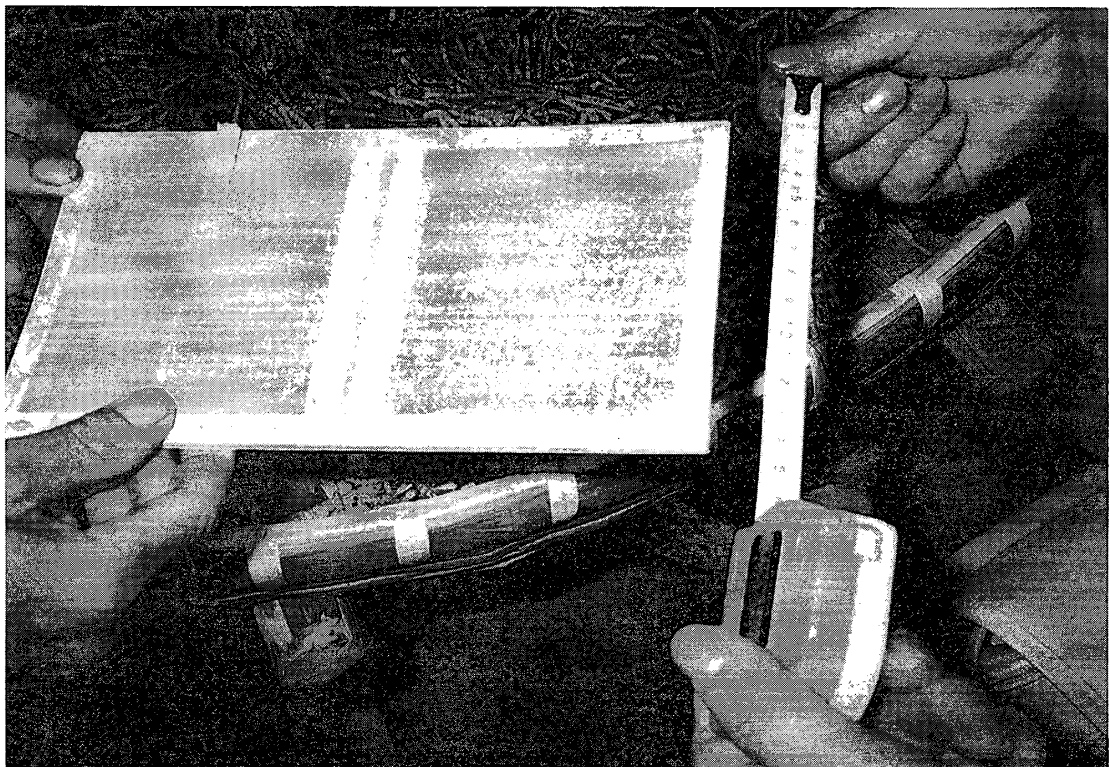


写真6 蚕種の枠

養蚕における女性の役割



写真7 掃き立て後の蚕は蚕簞を重ね、間に布団を敷いて保温につとめる。(2001年6月撮影)

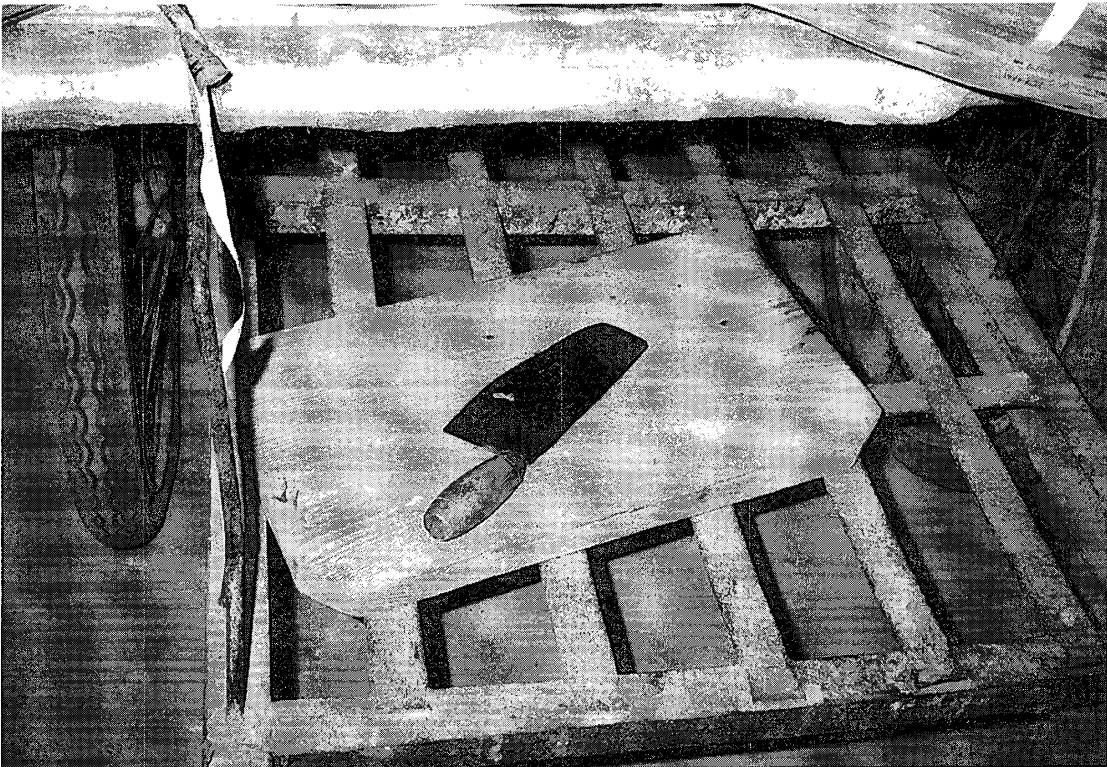


写真8 稚蚕にくれる桑を切る組板と包丁 (2001年6月撮影)

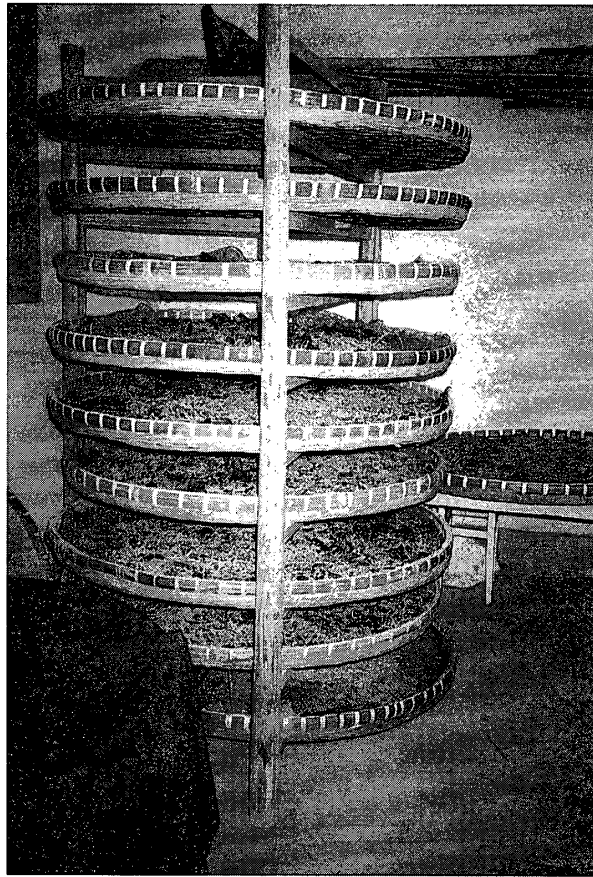


写真9 蚕台と蚕籠（2001年9月撮影 以下同じ）



写真10 給桑中

養蚕における女性の役割

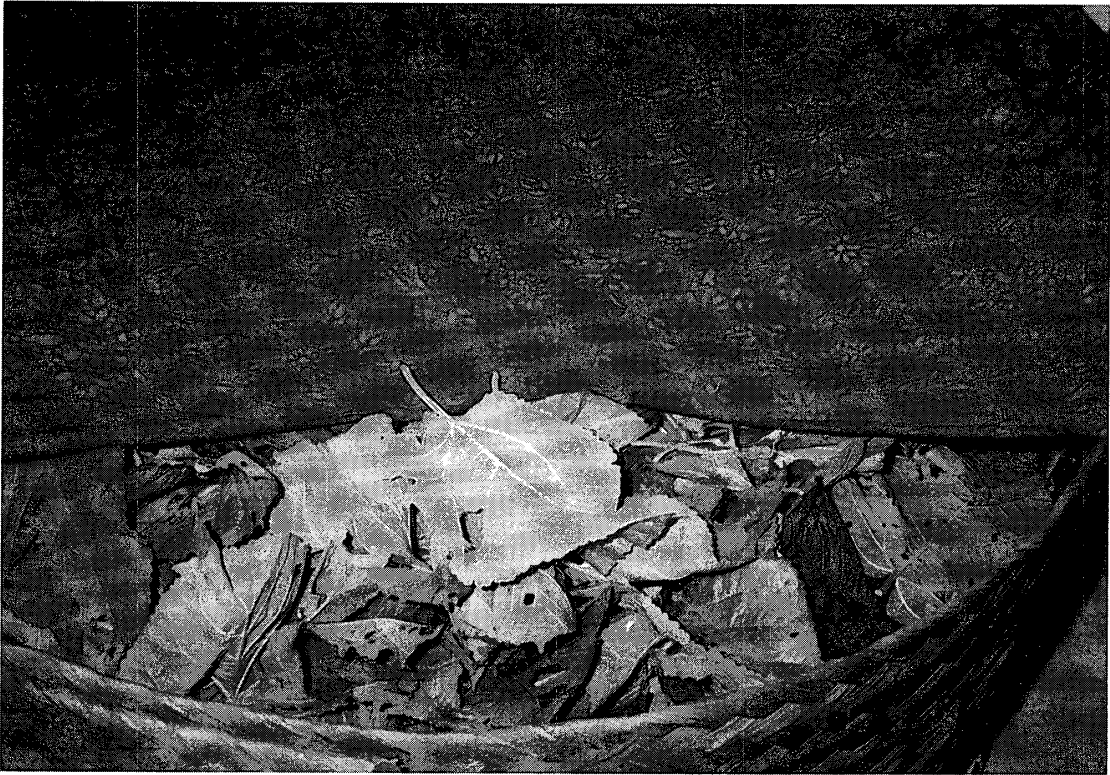


写真11 摘んできた桑は乾燥しないよう、布をかけて保存する



写真12 桑を摘みにいく時の籠と天秤棒

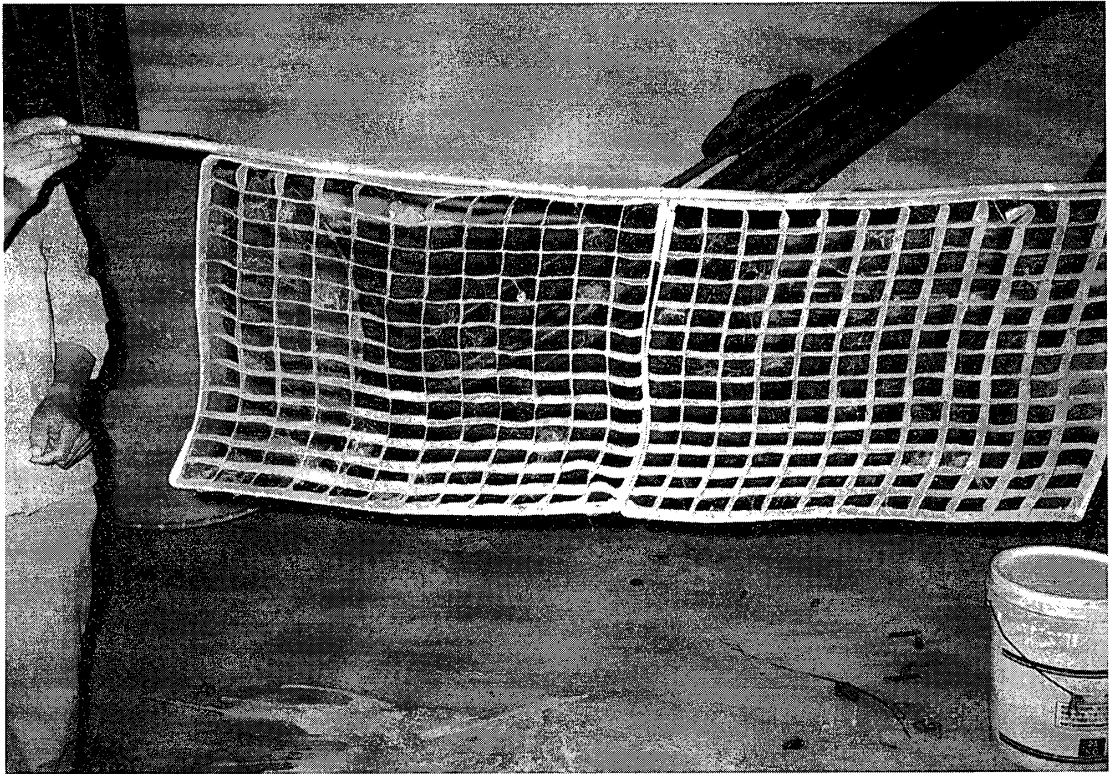


写真13 方格子 日本で言うマブシ
上簇の時、蚕簞の上にこれを吊しておく。蚕が穴一つずつに入って、繭を作る



写真14 湖州の含山寺

養蚕における女性の役割



写真15 含山寺の蚕花神

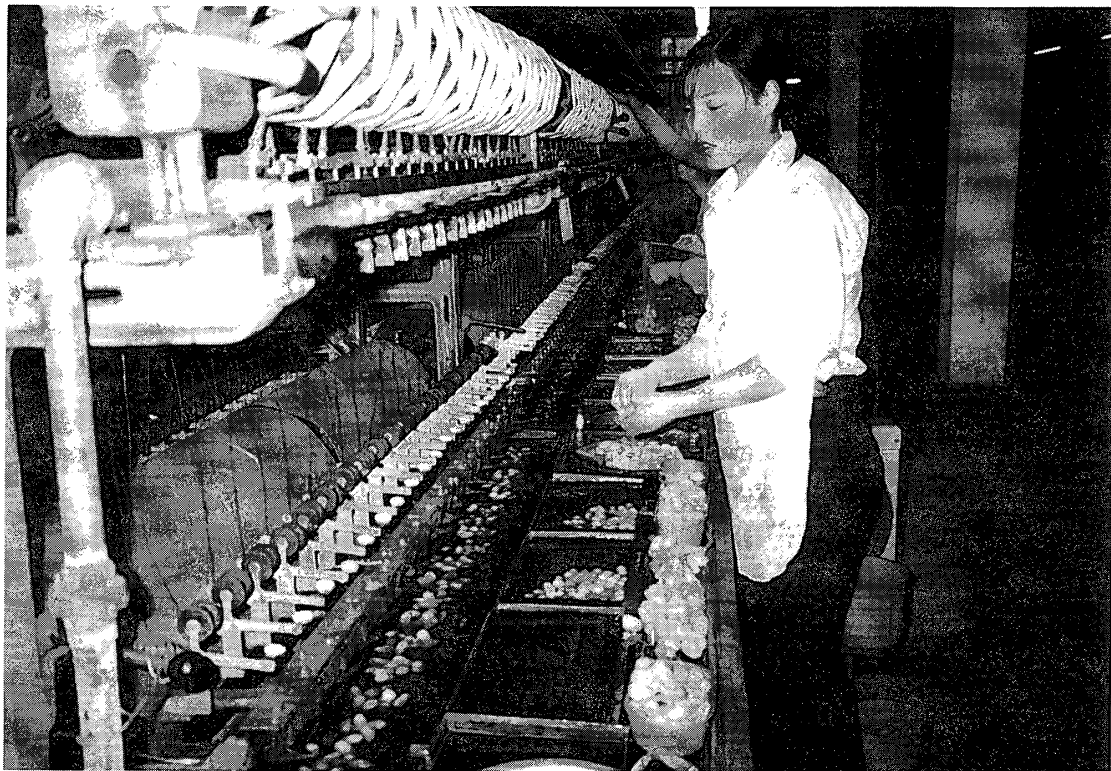


写真16 現在の工業化された糸紡ぎ（蘇州市）



写真17 真綿づくり（蘇州市）真綿はベッドカバーなどに使用する



写真18 川をひき込んだ洗い場，洗濯も食材洗いもここで行う 王家付近

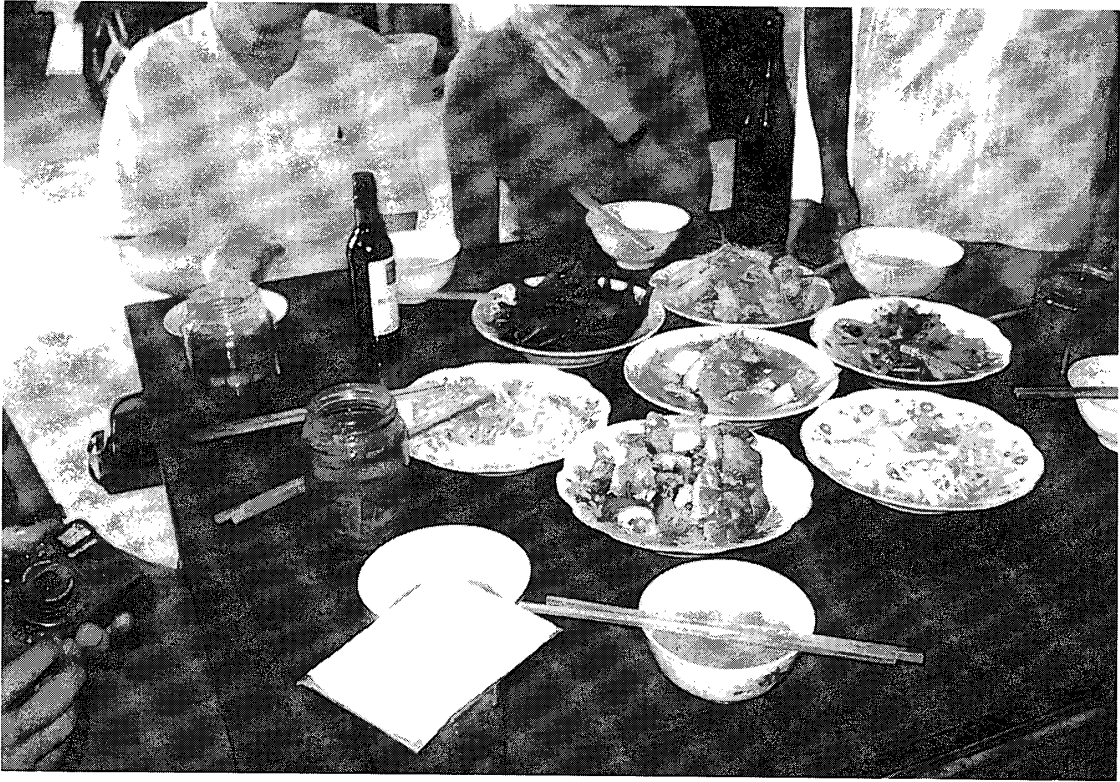


写真19 王家の食卓。来客用のご馳走が並ぶ。